

# 知識の実践的マネジメントを記述する： エスノメソドロロジー研究の可能性

○慶應義塾大学文学部 池谷のぞみ

## 1 目的と方法

ガーフィンケルがエスノメソドロロジーとして提示したプログラムは、人々の実践的行為を知識の実践的マネジメントとしてとらえようとしたものであることは随所からうかがえる。つまり、状況に埋め込まれた行為がいかに関係されているのかを見ることは、秩序がいかに関係されているかを理解し記述することでもあり、またどのような知識がいかに関係されているかを理解し記述することでもある。〈今ここ〉においてメンバーがその場を理解できるのは、〈今ここ〉の状況に固有の知識と、その組織場面に固有の知識両方に依拠することによる。その組織場面に固有の知識には形式化されたものもそうでないものも含まれる。

この「組織において形式化された知識」こそ、ガーフィンケルが提示したプログラムにおいては位置付けがあいまいなまま今日に至っているものである。これは知識の社会的ストックの一形態である。エスノメソドロロジー研究者はややもすると、形式化された知識をエスノメソドロジック的記述と対比するものとし、あるべき記述として自らの記述を提示する構図を作ってきた。本発表では、この点を再検討し、図書館における目録作業の一部の分類作業を分析し、形式的知識もまた実践的構成物として捉えることによって、開かれる可能性を論じることをめざす。

## 2 実践的構成物としての「組織において形式化された知識」

組織や共同体のメンバーが秩序だって活動する上で、知識を体系化し、それに変更を加えながら維持することは、欠くことのできない行為として位置付けられる。研究対象とした大学図書館での分類作業は、図書館員の職業団体が携わっているデューイ十進分類法に依拠しているものの、分類体系は必要に応じて独自に拡張・改変されてきたものである。改変の判断は、分類体系を知識の発展に合わせていくことが理想であり、利用者の便宜を図ることが重要としながらも、常に抱える未整理分の資料の量と改変に伴う図書の再配架の作業量とを考慮しながらなされる。

## 3 結論

このように実践を「組織において形式化された知識」の実践的マネジメントとして記述することは、標準的な適用を意図して作られた知識のストックを適用するには各組織におけるワーク、さらに各状況でのワークに関わることを理解し記述することでもある。こうした記述は実践者のコミュニティが自らの知識のストックのあり方や扱い方を検討する上で一定の意味をもつ材料となることが考えられる。つまり、記述を踏まえて学術的な知見を得るのとは別に、こうした記述は組織における実践のあり方を検討する実践者にとっても寄与する可能性がある。